

の外側部に扁平上皮癌が認められ内側部は炎症であった。症例2は60歳男性で主訴は右頬部腫脹、右上顎洞腫瘍を認め開放生検の結果扁平上皮癌と診断され、術前に40Gyが照射された。照射前、照射1か月後のFDG-PETとMRIを比較した。MRIでは腫瘍の大きさに変化はみられないが、PETではFDGの集積程度と範囲が縮小していた。またPETで右耳後部リンパ節に集積があり手術により転移巣であることが判明した。症例3は74歳男性、主訴は左舌縁部腫瘍。生検にて扁平上皮癌と診断され術前40Gy照射が行われた。治療前の造影CTでは腫瘍の位置は明瞭でないのに対しFDG-PETでは舌の左側にFDGの強い集積を認め左深頸部リンパ節部にも集積がみられた。照射1か月後造影MRI冠状断像では腫瘍は舌の左側に淡く造影を受け、PETで同部は照射前に比し集積が低下していた。腫瘍全摘および頸部郭清術が施行されリンパ節転移が確認された。

舌、上顎洞癌においてFDG-PETは原発巣のみならずリンパ節転移の検出に優れており、治療効果判定にも有用であった。

32. ^{99m}Tc -MAG₃による腎クリアランス値の算出とその評価

末廣美津子 濱田 顯 立花 敬三
杉本 佳則 河中 正裕 福地 稔
(兵庫医大・核)

糖尿病性腎症における分腎機能評価の指標の1つとして ^{99m}Tc -MAG₃による腎クリアランス値を算出し、その有用性を検討すると共に ^{123}I -OIH(OIH)によるERPF値および ^{99m}Tc -DTPA(DTPA)によるGFR値との比較を行った。

尿蛋白、クレアチニン、BUN値から糖尿病性腎症が疑われる糖尿病患者19例を対象とした。性別は男性9例、女性10例、年齢分布は42歳から87歳、平均64.8歳である。全例に水負荷後MAG₃を投与し、Russellらの方法に準じて一回採血法による腎クリアランス値を算出した。全例で前後2日以内にOIHによるERPF値を、さらに9例ではDTPAによるGFR値を算出し比較した。

MAG₃の腎クリアランス値は右腎で $97.0 \pm 56.3 \text{ ml/min}$ 、左腎で $88.1 \pm 53.7 \text{ ml/min}$ であった。一方OIHによるERPF値は右腎で $156.3 \pm 94.5 \text{ ml/min}$ 、左腎で

$138.7 \pm 91.0 \text{ ml/min}$ 、DTPAによるGFR値は右腎で45.1±30.8ml/min、左腎で42.9±36.1ml/minであった。MAG₃によるクリアランス値とOIHによるERPF値とは右腎で相関係数 $r = 0.718$ 、左腎で $r = 0.894$ と有意の相関関係が得られた。またDTPAによるGFR値とは、右腎で相関係数 $r = 0.773$ 、左腎で $r = 0.765$ と、いずれも有意な相関関係が認められた。

糖尿病性腎症が疑われる症例の分腎機能の評価は臨床必要であり、その評価におけるMAG₃の腎クリアランス値は臨床的に有用な指標の1つであるとの結論を得た。

33. 原発性胆汁性肝硬変患者の腰椎骨塩量の経年的変化と活性型 Vitamin D による影響

正木 恭子 塩見 進 宮澤 祐子
城村 尚登 植田 正 池岡 直子
黒木 哲夫 小林 紗三 (大阪市大・三内)
小橋 肇子 岡村 光英 越智 宏暢
(同・核)

原発性胆汁性肝硬変(PBC)では、しばしば骨病変を合併することが以前より知られている。今回、骨塩量測定装置を用いて女性のPBCおよび女性肝硬変患者の骨塩量の経時的变化を検討し、さらに活性型Vitamin D製剤による治療を行いその効果を検討した。

[対象・方法] 女性PBC46例、女性肝硬変64例において第2-4腰椎のbone mineral density(BMD)値を測定し健常例と比較検討した。さらにPBC26例、肝硬変39例において経時的に第2-4腰椎のbone mineral content(BMC)値を測定し、そのうちPBC5例、肝硬変17例において活性型Vitamin D製剤(1 α , 25(OH)₂D₃)0.5-1.0 $\mu\text{g}/\text{日}$ を投与しBMC値の経時的変化を測定した。

[成績] 女性PBC患者のBMD値平均は30歳代0.998 g/cm²、40歳代1.020 g/cm²、50歳代0.771 g/cm²、60歳代0.619 g/cm²となり50歳代、60歳代において平均値は有意に低下していた($p < 0.01$, $p < 0.001$)。女性肝硬変患者のBMD値平均は40歳代0.886 g/cm²、50歳代0.794 g/cm²、60歳代0.689 g/cm²となり50, 60歳代において平均値は有意に低下していた($p < 0.01$, $p < 0.01$)。女性PBCにおける未治療群のBMC値の年平均変化率は-3.4%で有意の低下を認め、治療群の